

市



立



病



院

だ



よ



り



令和5年 1月号

地域中核病院としての役割と診療機能充実に向けた取り組み

当院では地域完結型の医療の提供体制を実現するべく、地域の中核病院が果たすべき役割に基づいて診療機能を整備してきました。

近年の医療業界を取り巻く環境の変化や、新型コロナウイルス感染症への対応の中で浮き彫りとなったさまざまな課題について、組織の再編成や改修工事等によって、さらなる診療機能の向上に取り組んでいます。

今回は、令和4年4月に新病院長として就任された福井新病院長にインタビューしていますので、ぜひご一読ください。



福井新病院長。病院全体のマネジメントをする一方、現在も消化器内科医としての診療を行っています。

「急性期医療・地域医療支援・がん診療」の3本柱プラス、地域中核の公立病院として果たすべき役割について

福井病院長にインタビュー

市立病院では、令和4年4月に福井副院長が新たに病院長に就任し、診療機能の充実や、八尾市をはじめとする中河内二次医療圏全体の医療機関の連携について、さらなる推進に取り組んでいます。

福井病院長は平成5年に八尾市立病院に赴任して以来、約30年間に渡って当院の診療を支えている医師です。



福井 弘幸 病院長

昭和59年大阪大学医学部卒業。臨床研修後、昭和63年から大阪大学医学部第一内科消化器研究室にて臨床研究。

平成5年八尾市立病院着任後、内科部長、消化器内科部長を経て、平成27年4月より副院長、令和4年4月より病院長に就任。院内では地域医療連携室室長・診療情報管理室室長を兼務している。

また、肝臓がん・肝炎などの肝臓疾患を中心に消化器内科を専門とする。

「まず、地域医療支援についてどのようなお考えをお持ちなのか教えてください。」

本院は平成16年に久宝寺駅直結の現在の場所に新築移転して以来、急性期病院としてその病院機能を拡充してきました。急性期機能の拡充を可能にするのが地域の医療機関、特に診療所の先生方との連携です。

地域の診療所で診断・治療が困難な循環器・消化器・糖尿病・脳循環・血液などの疾患の患者を紹介いただき、当院で精密検査・治療を実施したのち、「逆紹介」という形で診療所へ戻っていただいています。このシステムが機能しているからこそ、当院は急性期医療を担う医療機関としての役割を心に考えることができます。

「各医療機関が自施設の機能を明確にすることによってスムーズな役割分担と連携が可能になっているということですね。」

専門的な治療が必要とされる消化器外科・呼吸器外科・乳腺外科・脳神経外科・

小児科・産婦人科・泌尿器科・整形外科・形成外科・耳鼻咽喉科・歯科口腔外科などでも多くの患者さんを診療しています。

「地域の急性期医療を担うためには、より広い範囲の疾患をカバーし、専門的な診療体制が必要ということですね。」

平成24年には地域医療支援病院の指定を受け、ますます地域の診療所からの紹介、そして逆紹介が増加してきています。また二人に一人が「がん」に罹患する時代の中、八尾市・東大阪市・柏原市からなる中河内二次医療圏の「地域がん診療連携拠点病院（国指定）」としてがん診療に取り組んできました。放射線診断科・放射線治療科・麻酔科・通院治療センター・緩和ケアセンター・リハビリテーション科・病理診断科・中央検査部・薬剤部などの診療局や、看護局を含め病院全体で患者様の治療やケアに取り組んでいます。

「診察室で行う診療以外にも、中央診療部門や診療局以外の部門も充実しているのが、市立病院の特徴でもありますよね。」

救急医療についてはどのような取り組みをされていますか。

急性期の疾患は、地域の医療機関からの紹介とともに、救急搬送を含めた救急診療がその受け皿となりま
すので、常に救急体制を整備しておく
必要があります。

また、がん患者様は胃がんの吐血
や大腸がんのイレウス(腸閉塞)など
のように症状の出現で救急搬送され
る場合もありますが、外来での抗がん
剤治療中や緩和ケア治療中に、感
染症や疼痛などで症状が急変し救急
搬送される場合も頻回にあるため、
救急で常に受け入れる体制を整える
必要があります。

— 確かに、がん患者様の救急に
ついては緊急性が高く、最優先での
受け入れが必要となりますね。

このように当院は地域医療支援病
院として、また地域がん診療連携拠
点病院として、地域の診療所では診
断・治療が困難な患者さんを紹介し
ていただく、あるいは地域の診療所
では対応できない救急疾患患者を受
け入れるという点で、かかりつけ医
機能を担う診療所との役割分担をし

ていく、この役目をしっかりと担っ
ていきたいと考えています。

— 副院長をされていた頃から救
急医療の強化の必要性について重要
視されていましたね。

本院は地域の中核病院として、内
科・外科については24時間365日、小
児科については中河内二次医療圏で
の輪番制による小児救急に対応して
います。

地域医療の支援には救急対応は不
可欠であり、がん診療を中心にして
いれば救急対応の機会が多くありま
す。当院も年間約300〜400件の救急搬
送を受けていますが、昨今の救急搬
送数の増加に対応できるよう、さら
に救急体制の強化を目指しています。

— コロナ禍で、二次医療圏外で
ある大阪市内からの救急搬送が増加
するなど、新たな課題も見えてきま
した。

医療計画の中で二次救急(入院加
療や手術を必要とする救急患者を対
象)、三次救急(救命が必要な重篤な
状態の患者などを対象)については
整備されています。

しかし、今回のコロナ禍のような

想定を超える事態が生じる場合の
対応については、今後の課題と捉
えています。

— 公立病院の使命として小
児・周産期医療も重要視している
ということですが。

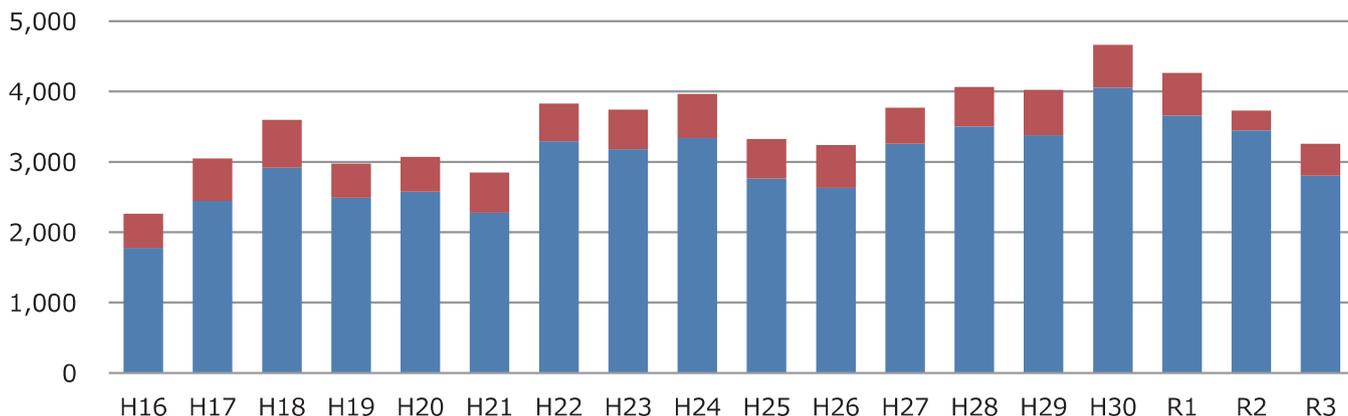
少子高齢化が進み、また新型コ
ロナウイルスの蔓延に伴う感染対
策の徹底により、感染症全般の流
行が抑制されたこともあり、小児
科の患者数は減少傾向となってい
ます。また、分娩数も以前は年間800
件程度ありましたが、令和3年度
は600件台にまで減少しています。

しかし、市民の皆様が安心して
生活を送るためのインフラ整備を
考えた時、安心して出産・子育てが
できる環境はかなりの優先度が高く
なると考えています。当院の産婦
人科のハイリスク分娩対応や、小
児科病棟・NICU(新生児集中治
療室)の存在は、公立病院の在り方
という点で重要な意味を持つと考
えています。

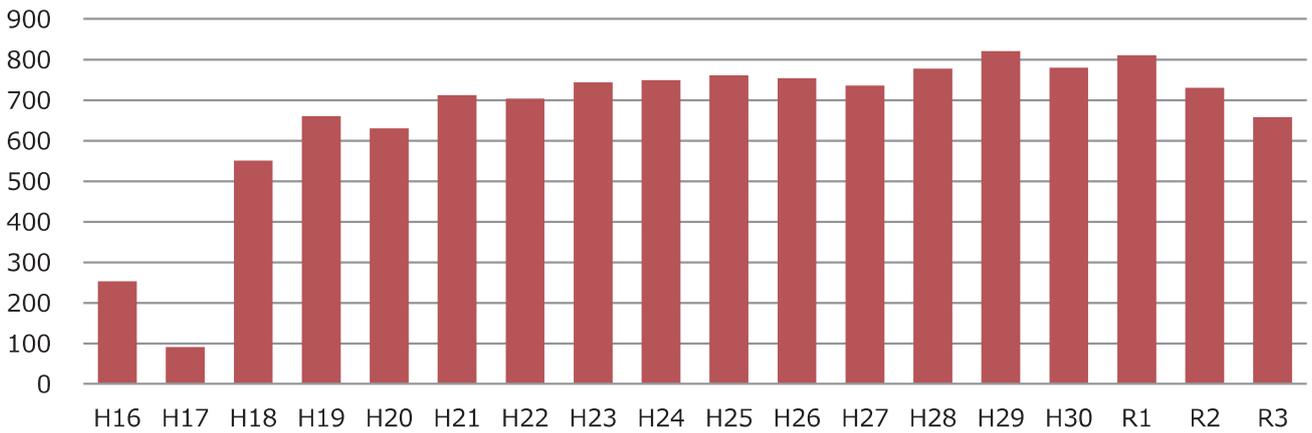
— インフラとしての医療の重
要性ですね。災害医療も同様に公
立病院としての優先度が高いとい
うことですね。

救急搬送件数 (平成16年度～令和3年度)

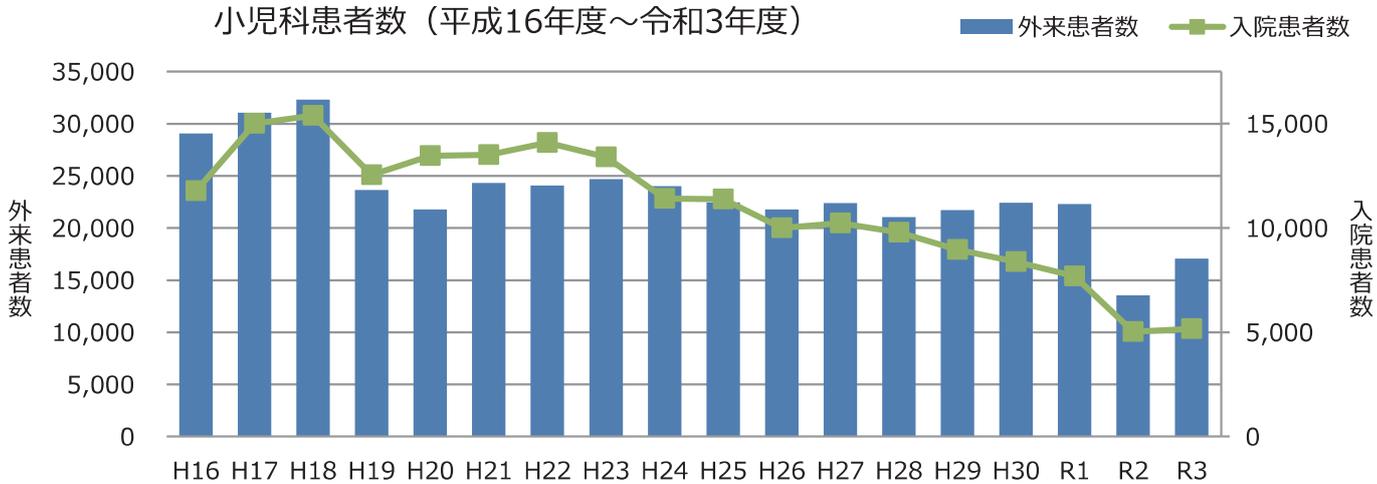
■ 小児救急搬送数 ■ 救急搬送数 (小児以外)



分娩件数（平成16年度～令和3年度）



小児科患者数（平成16年度～令和3年度）



当院は八尾市の災害医療センターとしての役割も担っています。

今回の新型コロナウイルス感染症の流行や災害発生時には、市保健所や市内の医療機関と連携・協力して八尾市の拠点としての機能を果たすことは本院の重要な役目だと考えています。

医療インフラの整備とも関連しますが、現在、新たな診療機能の拡充に向けた院内工事を行っています。

今年度中に整備することを目標に、「HCU（ハイケアユニット）病棟の新設」、「内視鏡センターの拡充」、「外来における中央処置スペースの新設」を実施しているところです。

すでにICU（集中治療室）が6床ありますが、新たにHCU病棟を整備する目的は何ですか。

新型コロナウイルス対応の中で、重篤な感染者をICUに入院させなければならぬ状況が

生じました。

この時、感染管理のためにICUに新型コロナウイルス以外の患者を入院させることができなくなり、当院の急性期医療機能の一部が制限されることになりました。

今後も想定される新たな感染症の流行などの事態に備え、8階東病棟の一部を改修し、コロナ禍のような状況では重症化患者の継続治療、平常時では救急対応力の向上や術後患者のケア充実が可能なHCU病棟とすることとし、令和5年3月中の整備をめざしているところです。

HCU病棟は重症者が入院するという点で、一般病棟と比較してどのような違いがありますか。

重篤な患者を想定し、救急蘇生装置や除細動器などの医療機器の常備や、手厚い看護配置が求められています。看護配置でいうと、当院の一般病棟では患者7名に対し1名の看護師の配置を基本としています。HCUでは患者4名に対し1名の看護師の配置が必要です。

外来診療フロアの改修についても教えてください。

内視鏡センター

各種機器を導入し、ほとんど全ての消化器疾患の患者さんに対して、内視鏡を使用しての検査・治療が提供できるようになっています。

上部内視鏡室2室、下部内視鏡室1室、X線併用内視鏡室1室、回復室(回復用ベッド6床)で構成し、内視鏡検査、処置の依頼に対して迅速に対応していきます。



主な検査・治療件数 (令和3年度)

● 上部消化管内視鏡	3,029件
食道ESD(粘膜下層剥離術)	6件
胃ESD(粘膜下層剥離術)	73件
● 下部消化管内視鏡	2,218件
大腸ESD(粘膜下層剥離術)	27件
● ERCP(内視鏡的逆行性胆管膵管造影)	207件
● EUS/EUSFNA(超音波内視鏡/超音波内視鏡下生検)	255件
● PTCD/PTGBD(経皮経肝胆道/胆嚢ドレナージ)	8件
● EIS/EVL 内視鏡的静脈瘤硬化療法/結紮術	20件
● 消化管ステント	12件
● イレウス管	36件
● 気管支鏡	29件



NBI 拡大内視鏡

画像処理システムを使用し、より早期の食道がんや胃がんの発見、範囲診断を行います。粘膜の微細な血管構造を拡大し観察することができます。



ダブルバルーン式小腸内視鏡

小腸内視鏡検査は原因不明の消化管出血、小腸腫瘍、炎症性疾患の診断、治療に行います。小腸は検査が難しい部位で、レントゲン検査が主でしたが、市立病院ではダブルバルーン式小腸内視鏡を使用することにより、小腸全域の検査が可能です。

まず、内視鏡センターですが、ここ数年内視鏡検査では鎮静化での検査が増加してきています。上部・下部消化管の内視鏡検査では、「苦しい・つらい・膨満感」などの不快感・苦痛を訴える方が多く、その解消のため、希望者には「セデーション」と呼ばれる、鎮静剤を使用し「ウトウトした状態」で検査を行うケースが増えていきます。

この場合、検査後に鎮静効果から

回復する時間が1時間程度必要であり、その回復用のベッドが必要になります。当院では回復スペースが狭く回復用ベッドも3床しかないためセデーション対応が限られていたのですが、今回の改修で回復ベッドを6床に設置し、セデーションにも十分に対応できるようになります。

— 内視鏡センターは検査・治療にフル稼働のイメージがありますね。内視鏡も紹介が多いのでしょうか。

健康診断などでの胃がんや大腸がんの疑い所見についての精査目的や、内視鏡を導入している診療所からも詳細な検査や治療目的で紹介いただくケースも増えています。各種機器を導入し、ほとんど全ての消化器疾患の患者さんに対して、内視鏡を使用しての検査・治療が提供できるようになっていきますので、今後も地域の先生方に積極的な紹介をお願いしたいと考えています。

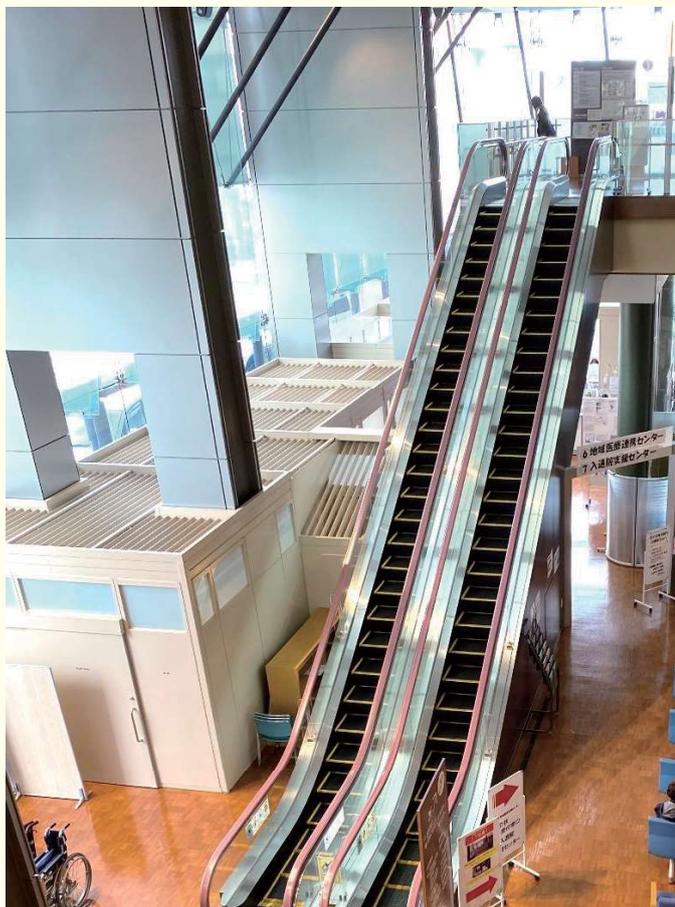
— 外来処置用のスペースを設ける工事も行っていますね。

多目的に使用できる外来処置用のスペースを、2階の採血コーナーの横に整備しています。主に抗がん剤治療を行っている4階の通院治療センターの運用をスムーズにするため、ホルモン注射などの比較的短時間で実施する治療については2階の処置用のスペースに移行する予定です。

通院治療センターでは、インターネット環境の整備や、一部のベッドへのテレビ設置など、抗がん剤治療中の療養環境を向上させる施設整備も行っています。

— 新型コロナ対応においては、内科系・外科系にこだわらず、多くの医師が業務負担を分担するとともに、看護局を始めとするメディカルスタッフも含めて病院全体での対応が評価されていますね。

新型コロナウイルス感染症は令和2年3月に初めての入院患者対応から100名以上の入院治療を続けています。また外来での診断・治療、休日の集団接種対応も含めたワクチン接種も行ってきました。



1階に拡充・移転した地域医療連携センター・入退院支援センター。個別のブースも多く確保されている。

先程述べたように、本来の急性期医療・がん診療・救急医療も維持しながらの対応であり、全職員が厳しい精神的・身体的ストレスを感じながら診療を続けてきました。

― 経験のない中で、対応方針や具体的な運用について、どのように判断・決定していったのですか。

急激な患者の増加時期には、毎週統括部門や担当部門で会議を開き、迅速な対応をしています。

約3年間に渡り外来・入院・受付業務をはじめ、各部門の病院職員・SP

C職員などスタッフ全員で対応してきましたが、安心安全な患者様の治療に努める一方、職員の健康管理にも十分な配慮が必要でした。

― そのような対応をしつつ、コロナ禍以前の市立病院の役割を果たしていくことも重要ですね。

災害的状况に対応する医療も公的病院の役割ではありますが、基本的にはコロナ禍以前のように、市民の皆様の安心安全のための急性期医療を中心とした診療機能を持続・向上させていきたいと考えています。

― コロナ禍で、ここ2、3年は地域医療連携にご苦心されていると思います。

地域医療連携室は、その重要性を鑑み、積極的な推進が必要なことから、私自身が室長を兼務しています。紹介患者の増加、また地域の先生方とスムーズな連携を可能にするためには入院治療を受ける患者様をサポートする必要があることから、令和4年3月に地域医療連携室を2階から1階に移転し、地域医療連携センター・入退院支援センターとして拡充しました。

― 吹き抜けで外光が降り注ぐスペースで開放感があり、また個別のブースが多く設置されて患者さんにも好評ですね。

印象だけでなく、感染対策、スペースの拡充と機能の集約により、患者サービスの向上面でも評価いただけるよう、スタッフ全員で親切で丁寧な対応を心がけています。

また、当院では最新の地域医療連携システムを利用した病診薬連携システムを稼働させています。患者様の同意を得た上で、地域の診療所から紹介頂いた患者様の外来・入院の診療内容、画像含めた検査結果、患者様への説明内容など、ほぼすべてリアルタイムで紹介元の診療所で閲覧いただけるシステムです（しっかりとセキュリティを担保しています）。

― 市立病院で治療中の期間も、紹介元のかかりつけ医で患者さんの診療情報を共有できるのですね。

当院の登録医は八尾市内で252施設、周辺エリアを含めると514施設あります。多くの登録医療施設でこのシステムが利用できるような環境をめざしています。

— 福井病院長自身も肝臓病・肝がん治療の専門家ですが、当院のがん診療についての特徴や今後強化したい点について、お聞かせください。

当院は国指定の地域がん診療連携拠点病院です。胃がん・大腸がん・肺がん・肝がん・すい臓がん・乳がん・子宮がん・前立腺がん・血液がんなど、多くの悪性腫瘍の診断・治療から緩和ケアまで幅広く対応しています。がんの治療で手術療法以外に、外

来でも可能な放射線治療や化学療法（薬物療法）の役割も重要です。また、消化管内視鏡下治療や放射線科医による血管内治療もあります。

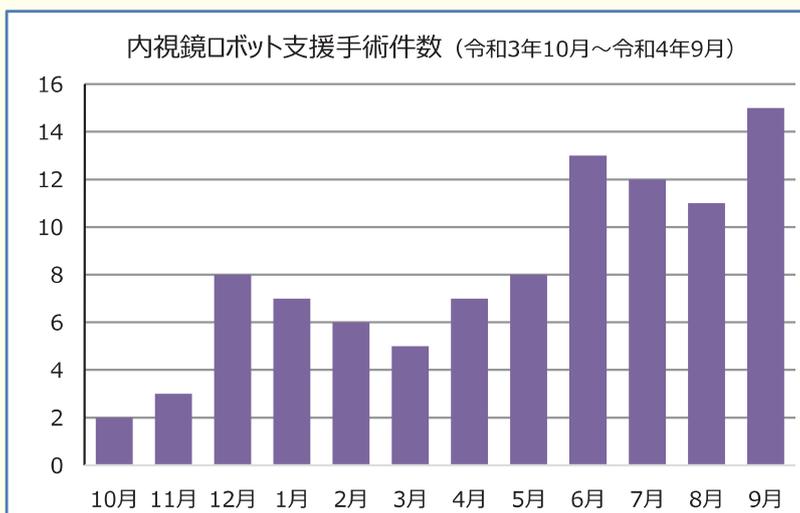
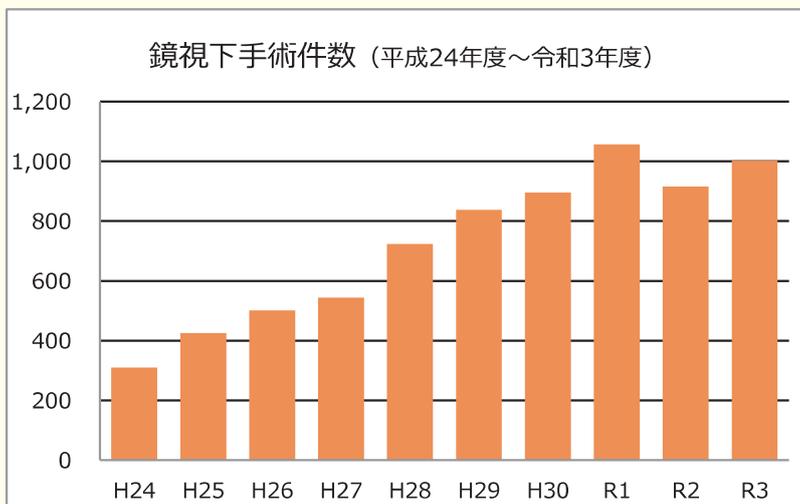
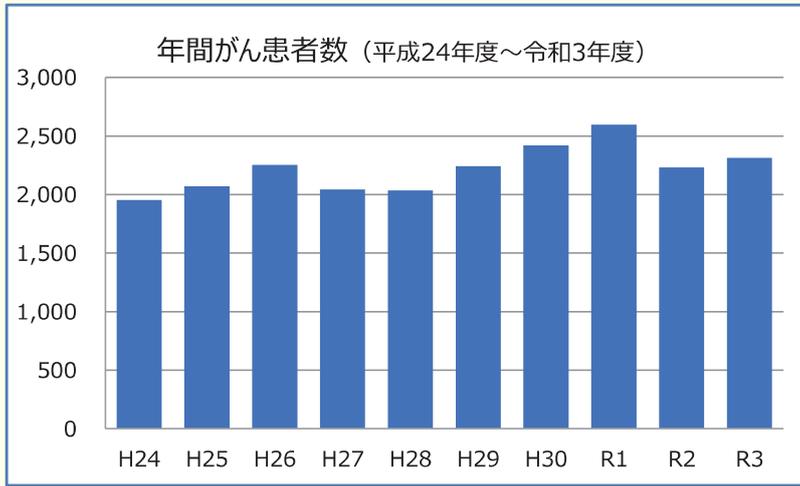
このようにがんの治療法は多岐にわたっており、患者様それぞれに最適な治療法を選択、あるいは複数の治療法を組み合わせることで治療していきます。

その中でも外科医による外科手術治療はがん治療になくしてはならないものです。本院は外科系の各分野に

エキスパートが揃っていますので、高度で安心安全な診療ができていますと自負しています。

— 近年、鏡視下（腹腔鏡、胸腔鏡等）の手術が増え、手術の安全性や術後のQOL（生活の質）の面でも向上が見られますね。

本院で治療したがん患者数は令和2年度にはコロナ禍の影響で減少しましたが、令和3年度から4年度にかけて増加傾向になっています。



また、鏡視下手術も同様の傾向が見られ、令和3年度は1,000件を超えています。令和3年10月に開始した内視鏡ロボット支援手術も、適用できる手術術式の拡大もあり、順調に件数を伸ばしています。

このように、最近10年の診療体制・実績の充実によって「がん診療なら八尾市立病院で」という声を聞かせていただく機会が増え、大変うれしく思っています。

— 福井病院長の専門である消化器内科についても、この機会にアピールをお願いします。

現在は消化器内科部長以下のスタッフに任せていますが、私自身も以前は消化器内科の専門医として、肝がんの「ラジオ波治療」という内科的局所治療を専門にしてきました。

幸いにも肝がんは、国を挙げての肝炎ウイルス対策が功を奏してきており、罹患者や死亡数は減少してきています。一方、胃がんや大腸がんは現在も死亡数が多い状況ですが、消

化器内科で治療できる割合が増加しています。

消化器内科では、前述のラジオ波治療で肝がん治療を、内視鏡下粘膜下層剥離術(ESD)で早期の食道がん・胃がん・大腸がんの治療を行っており、近年その件数が増加しています。

また最近増加している膵臓がんに対しても、内視鏡下精密検査(EUS FNA)を積極的に施行しており、膵胆道系内視鏡下治療とともに消化器内科で対応しています。

— 市立病院に30年近く勤務される中で感じる病院の変化は。

大阪大学医学部で、当時の上司に「大学で基礎あるいは臨床研究に従事するのも良いが、地域の臨床医の先生方とともに地域医療を支えて行くことも君達に与えられた仕事である」と言われたことが頭にあり、市立病院の医師として研鑽を積みつつ、「八尾市・中河内二次医療圏の医療の向上に役立ちたい」という思いを持って勤務を開始しました。

平成5年に本院に赴任した時は、肝がんでの入院期間は30日程度であったと記憶しています。現在はラジオ波治療で7日前後、腹腔鏡下肝切除術では10日前後と短期間で濃密な治療を行い、外来で経過観察しつつ、普段の治療は地域の診療所をお願いするという役割分担も進んでいます。

入院期間の短縮が可能になり、年間の新入院患者数は、赴任した平成5年当時は4〜5千人でしたが、最近では約1万人と2倍以上の患者様に対応できるようになりました。

— 病院長になって、改めて感じていることがあれば教えてください。

院内では医療スタッフをはじめとする多くの職員同士が、皆会釈して「おはようございます!」などの声を掛け合っているのを見かけます。自然とそういう態度や言葉が出る環境があること、また、患者様に役立つ質の高い診療を協力して成し遂げよう、という気持ちを皆が持っているということが、安心安全な医療をスムーズに提供するために大切であり、今後の診療内容を更に改善・向上していくというモチベーションになると考えています。

— ご多忙とは存じますが、休日ほどのように過ごされていますか。

10年程前から休日には5km程度のジョギングをしていました。コロナ禍が始まった3年前から、勤務の忙しさなどもあり中断してしまったりところ5kg肥ってしまいましたが、9月後半から再開しています。以前のように、時には琵琶湖周辺や京都の鴨川べりをジョギングできるようになれば良いなと思っています。

14歳になるタイプードルと散歩するのも、心身の健康維持に役立っていると思っています。

消化器内科の代表的な入院疾患（令和3年度）

1.胆道結石	90件	7.肝不全	35件
2.早期胃がん	73件	8.腸閉塞	34件
3.肝細胞がん	60件	9.進行大腸がん	30件
4.膵がん	57件	10.憩室出血	29件
5.急性膵炎	45件	10.膵腫瘍・嚢胞	29件
6.下血	44件		

※上位10疾患（大腸腺腫を除く）

内視鏡下粘膜下層剥離術（平成26年度～令和3年度）

